

2021年6月6日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書19章1～12節

説教題：支え導く方

以前、礼拝で告白していた「使徒信条」の中にこんな言葉があります。「主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ…」。この「使徒信条」のために、ピラトという人は、おそらく世界でも屈指の悪者になってしまったのです。可愛そうなことです。本人も、さぞ不本意だと思います。彼は本来、優秀な官僚だったと思われます。皇帝から直接任命された第5代ユダヤ総督として、10年間、ユダヤを治めています。そして、聖書を読むと、ピラトはむしろイエス様を何とか助けようと努力したことが分かります。彼は、イエスを釈放したいと思ったのです。しかし、結果的に「十字架につける」という判決を出してしまいます。なぜ、そうなってしまったのでしょうか。何が問題だったのでしょうか。私達は、彼の姿から何を学べば良いのでしょうか。今日は「ピラトの問題」を中心に学びます。

1：ピラトは何をしなかったのか～（神との関係を第一とする）

ユダヤの指導者達は、ピラトに「イエスを十字架に掛けてくれ」と要求しました。しかしピラトは、「イエスの中には彼らが言うような罪はない」と見ていました。18章38節で、19章4節、6節で、繰り返し「私はこの人に何の罪も認めません」と言っています。しかしユダヤ人達には、要求を取り下げる気配は見られません。それで彼は、3つのことをしました。

初めにピラトはこの問題を取り扱うことを避けようとしてしました。そして「過ぎ越の祭りに1人の囚人を釈放する」という習慣を利用してイエス様を釈放して、それで全てを済ませようとしてしました。18章の最後です。しかしユダヤ人指導者達は「この人ではなくてバラバを」（40）と言ってバラバの釈放を要求しました。次にピラトは、妥協を図ろうとしてしました。ピラトは、イエスをムチ打ちにするように命じました。ムチにつけてある鉛や動物の骨が背中に食い込んで、背中は、畑の畝のようになったと言われます。さらに兵士達は、イエスをさんざんバカにして惨めな姿にしました。ピラトは、それをユダヤ人達に見せて「こんな惨めな者がローマに対する反逆者であるはずがないだろう。もう勘弁してやったらどうか」と持ちかけました。しかし彼らは「十字架につけろ」と言って聞きませんでした。そこでさらにピラトは「あなた方がこの人を引き取って十字架につけなさい」（6）と言いました。もちろん、ユダヤ人には誰かを十字架につける権力がない、ということを知っていました。知っていて、「自分達の責任で好きにしろ」と、彼らに問題を投げ返したのです。

3つのことを申し上げました。ピラトはイエス様を逃がすために色々と努力しています。しかし一方で、彼がやらなかったことがあります。彼は総督ですから、決定を下す権力を持っていました。彼が「イエスには罪を見出さない、無罪放免」と言えば言えたし、本来、それで良かったのです。しかしピラトは、この「自分で決定を下す、決断する」という一番肝心なことをせずに、それ以外のことで解決しようとしたのです。ここに彼の問題があり、そして信仰のレッスンがあります。それは何かというと、第一義的なものをそのままにして、第二義的なもので問題の解決を図ろうとしてもダメだということです。

信仰者にとっての第一義的なこととは何でしょうか。ある牧師のところには大きな問題を持って相談に来られた方がいました。牧師は、話をじっと聞いていました。確かに大きな問題でした。しかし牧師は、話を聞いた後でこう言いました。「良く分かりました。大変ですね。ところで、あなたは、最近、聖書を読み、祈り、神様との個人的な交わりをするためにどれくらいの時間を使っておられ

ますか」。そうしたら、その人がハッとて、次にニヤッと笑って、そして言いました。「そう言えば忘れていましたわ」。信仰者にとっての第一義的な事柄というのは、神様との関係です。皆さんは、問題に圧倒され、神様との交わりを忘れてしまうこと、その氣力を無くしてしまうことはないでしょうか。私には、しばしばそういう時があります。問題が大きく、神様が小さく見えるのです。しかし、そういう時、私はダニエルのお話を思い出すのです。

ダニエルは、エルサレムからバビロンに捕囚民として連れて来られました。しかし優秀だったので、バビロンの宮廷でも重く用いられました。バビロンの高官達は面白くありません。何とかしてダニエルを陥れようとします。彼らは、ダニエルが日に3度、跪いて真の神に祈っていることを知っていたので、王をだまして「これから30日間、王以外にどんな神も人も拝む者は獅子の穴に投げ込まれる」という法令を出させて、ダニエルを窮地に追い込もうとしました。ダニエルはどうしたのでしょうか。「ダニエルは、その文書に署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かって開いていた——彼は、いつものように、日に3度、跪き、彼の神の前に祈り、感謝していた」(ダニエル6:10)。ダニエルは、淡々として神に祈り、神との関係を第一とする姿勢を崩さなかったのです。そして、結果的に神様に守られて行くのです。

私達は、目に見えない神に頼る前に、目に見える人に頼るということをしてしまう面があるのではないのでしょうか。それも大切です。ある牧師先生は、子供さんの問題で本当に悩んで、力になってもらえそうな人に助けを求めたのです。そしてその人の助けで、子供さんが立ち直って行くのです。牧師は言うておられました。「『助けて下さい』と言った時が、助かった時だった」。だから、人に頼ることも大切です。しかし、同じように大切なのは、神様に頼ることではないのでしょうか。「詩篇」にも「私の助けは、どこからくるのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る」(詩篇121:1~2)とあります。先週もご紹介しましたが、ある牧師がインターネットの動画で切々と訴えておられました。「どうにもならないような時、イエス様が『わたしのところに来なさい』と言っておられます。辛い時、苦しい時は、神様を呼んで下さい。神様があなたのそばに来て、あなたの問題を解決して下さいます」。神に助けを求めること、帰るべきは、そこではないのでしょうか。その時、私達は、問題の中で、神様に支えられ、また神様の霊に動かされた助け人が与えられ、そのようにして、神の御手が取り囲んでいることを体験して行くのではないのでしょうか。

2: ピラトはなぜ決断しなかったのか〜(信仰に立つ)

ピラトは、ユダヤの支配者ですから、自分の信じたところに従って決断すれば良かったのです。自分でも「私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか」(10)と言っています。「罪を見出さない」と信じるなら、そうすれば良かったのに、肝心なことをしないのです。なぜ、彼は、毅然として信じるところに従って決断をしなかったのでしょうか。

実は、彼には決断を下せない理由がありました。彼は、この時までには何度かユダヤ人と衝突していました。詳細は省きます。当時のローマ帝国では、支配されている国民は、総督があまりにひどい場合には、皇帝に直訴することが出来ました。そして皇帝は、「確かにこれはまずい」と判断した場合には、総督を罷免することがありました。ユダヤ人には、そういう切り札があったのです。ピラトは、ユダヤ人の感情を害することを随分して来ています。ここで彼らの訴えを無視して、直訴されるようなことがあれば、自分の立場が危ないのです。彼は、イエスがユダヤ人達の言うような反逆者でないことを知っていました。しかし、真実に立てば政治家としての立場が危うくなります。

だから真実に立てなかったのです。真実と現実(保身)の間で揺れている、それがこの時のピラトの姿なのです。

この真実と現実のバランスの上でオロオロしている姿、実はそれも私達の姿ではないかと思うのです。私達は真実(真理)を知っています。カール・バルトという有名な神学者がいます。ドイツの教会がナチスに協力して行く中で、ナチスに抵抗した人でもあります。戦後、彼がアメリカに講演に呼ばれた時、1人の新聞記者が聞きました。「バルト先生、先生がこれまで発見した最も深い思索(真理)は何ですか」。バルトは、しばく考えてこう答えました。「主、我を愛す、主は強ければ、我、弱くとも、恐れはあらず、わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、我を愛す」(讚美歌 461 番)。私達も同じ思いです。私達も「主、我を愛す、主は強ければ、我、弱くとも、恐れはあらず…」という所に立って、神様に委ねて生きようとしています。しかしもう一方で、信仰に立てない、どこかで現実に目を奪われ、神の愛、神の力を疑っている、そういう面があるのではないのでしょうか。信仰の世界と現実の世界の狭間でおろおろしている面があるのではないのでしょうか。

エミー・カーマイケルという人がいます。イギリスの宣教師としてインドで 50 年間奉仕した人です。彼女が1人のインド人女性の話を紹介しています。その女性は、少女の頃、たった一度だけキリスト教の神様の話を聞きます。その時、彼女は神様を信じるのです。しかし、それ以降、教会とは全く関わる事が出来ないまま、ヒンズー教が社会を支配しているようなインドの農村でひとり神を信じて生きるのです。それは、大変なことでした。17歳で結婚しますが、貧困に苦しんだり、夫が正気を失ったり、子供が死んでしまったり、大変な困難を経験します。回りの人々は「あの女が変な神を信じているからだ」と噂します、責めます。彼女の現実、辛く悲惨でした。しかし、大変なことがある度に、彼女は心の中でこう言うのです。「神様、私はあなたにつまずきません」。

私達の現実、私達に神を実感させないことがあるばかりではなく、時には「神がおられるなら私の人生に、なぜこのようなことが起こるのか」と言いたくなることさえあります。しかし私達にとって大切なのは「私はあなたにつまずきません。私を愛して下さるあなたに信頼します」と言って神の真理に立つ決断をすることではないのでしょうか。このインドの女性は、22年間、信仰を持ち続け、22年後にエミー・カーマイケルに再会し、洗礼を受けるのです。そしてやがて病気が癒された夫もクリスチャンになるのです。神の守りの御手を感じます。確かに現実、厳しいです。時に、どうして良いのか分からないようなこともあります。しかしそこで「神様、私はあなたにつまずきません」と告白すること、覚えたいと思います。

3: ピラトの一番の問題は何だったのか〜(神の権威の下で生きる)

ピラトにとって一番の問題は何だったのでしょうか。彼はイエス様に言います。「私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか」(10)。しかし、そのピラトにイエス様は言われます。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません」(11)。ピラトの権威は皇帝から与えられたものでした。彼は「あなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威がある」と言いますが、結局、彼には正しいと思うことをすることは出来ないのです。彼に与えられていた権威は、彼が正しく生きることを励まし、支えるものではなかったのです。結果として「この人を釈放するならあなたはカイザルの味方ではない」(12)の一言で、彼の気持ちは、真実を無視して、自分を守ろうとする方に決まっています。

私は、私達が自分の上におられる本当の権威者である神、私達を良く生かして下さる神を知って

いることの恵み、また大切さを教えられます。「アルファ・コース」でこんな話を聞きました。ある会社の社長秘書をしている女性がいました。ある時、社長に電話がかかって来ました。社長は「留守だと言ってくれ」と言いました。彼女は言いました。「ご自分でどうぞ。私は、嘘はつきません」。社長は言いました。「これは業務命令だ」。彼女は言いました。「どんな場合でも、私は、嘘はつきません」。その時は、社長はカンカンになって怒りましたが、しかし、それまで以上に彼女を信用するようになった、という話でした。彼女を生かし、支えていたのは、「良く生きるように」と導く神様だったのではないのでしょうか。

学校に勤めていた時、日曜学校の女の子が言ったのです。「私の天国の家は、私が生きている間にしたことを材料にして作られるんだよ。だから、私は、いっぱい良いことをするんだ」。私はその時、思ったのです。「神様を知っているということ、自分の上におられる方を知っているということは、子供にも力を与えるのだ」。

私達が、神様を本当の権威者、「私の主」として、自分の上をしっかり置くところから、私達は、世に在って、神の御心に適う歩みをしていく力が与えられて行くのではないのでしょうか。私達の上には、私達を愛し、期待し、見守っておられる神様がおられるのです。私達は、この方を戴いて歩んで行けるといふ、大きな特権を与えられているのです。

終わりに

神との関係を第一とする、信仰に立つ、神の権威の下で生きる、今朝、3つのことを申し上げました。ピラトの姿は、私達の人間の弱さと苦悩を教えてください。その困難を通して行くためには、真の神様を見上げ、導きを求め、神と共に生きて行くことだと思えます。信仰の歩みを前へと進めて行きましょう。